

## 宮井敏先生を偲んで



宮井敏氏略歴

一九二六年八月一日生まれ 五年同同志社大学文学部文学研究科修士課程を了  
 後、四月同同志社大学文学部助手し入社、五年同同志社大学短期大学助手、六月同同志  
 社短期大学文学部助教授、六七年同同志社大学助教授、九二年名教授  
 講壇、五八年同同志社大学助教授、六七年同同志社大学助教授、九二年名教授  
 一九九九年六月一日退職、七十二歳

先生は様々な異領域に生息して、どの領域でも専門家と評価されていたから、令夫人以外には、先生を全的に語りうるひとはいまい。私などが指名されて恐縮だが、お許しを乞うと同時に、一面的であることはやむを得ないと開き直る。

先生のマルチタレントの異才と誇りも他人が許容するハイレベルにあった。文にも講演にも堪能で、ある時一種の才能だと評したら、いや、これが才能そのものだと言われたことがある。

高商以来商学部にも長く深くコミットされたことから、この組織の生き字引でもあられたが、その逆影響もあつたかと思われる。なかでも、北山講とそのリーダーであった安岡教授との関係が最も密だつたであろうが、先生は安岡教授を無類のサタイヤリストと高く評価されて、メンバーともども、死の直前まで山行をもにされた。「登りの西口下りの敏」とい

う名句もうまれたが、登りも下りも、余程の難所以外は、先生の博識はとどまることなく吐露され続けた。

私事、アーモスト・スクールへの同行をはじめ、長大な時間を一緒に過ごしてもらう幸運に預かつたが、興味は尽きなかつた。先生の突然の死により、私の楽しみが取り上げられて、やるかたない。風俗思想論の故山本明教授は「この人（鶴見教授）の雑談ほど有意義なものを、ほかは知らない」と言っておられたが、私にとつての先生は、まずはそんな感じの存在だつた。人生の機微のあらゆることを教えられた。

あるとき、私から孔子の陸沈の思想を論じたら、それは俺のことかと言われた。そう、だぶらした積もりだつた。そんな具合で、私は無数の質問を先生に仕掛けてきたが、いよいよこれから、受けていただくに値する質問を発し続けたいと考

えていた矢先であつた。神仏混淆信者の私などを相手に何を考えておられたか、今は知るよしもないが、淫祠邪教だと評しながら、この世界にも実に深い理解を持つておられた。

先生の思想はイギリスのユートピア思想、功利主義、新教それに新島先生をふくむ日本の諸思想の不思議な混成であつたが、この混成を統べる人間宮井先生のコアを確認しきれなかつた思いが残っている。先生にはシニシズムやニヒリズムは陰さえなかつた。先生の高等快樂計算は単なる計算ではなく、些事を快樂に変換する戦術を内蔵していた。要するに、人生を楽しんでおられた。それだけに他に無念が残ると思う。

西田芳次郎（大学商学部教授）

# 「慈なり 故に能く勇なる実践人」

— 大塚達雄先生を偲んで



大塚達雄氏略歴

一九二四年四月一日生まれ。四九年三月同志社大学法経学部を卒業後、五四年同志社大学文学部助手として入社。五五年専任講師、五七年同助教、六四年教授、九二年名誉教授。  
一九九九年七月二六日永眠 七十五歳

大塚先生は同志社大学文学部で社会福祉学の研究教育に三十八年間に渡って携われ、その後、花園大学が社会福祉学部を創設するにあたり、請われて学部長に就任し、四年間を務められた。また、社会福祉法人京都障害児福祉協会を設立し、理事長として障害をもつ人たちの療育に一生をささげられた。

一昨年九月、大塚先生は自伝的内容を『福祉の心との出会い ―社会福祉実践の歩みから―』（ミネルヴァ書房）にまとめられた。この中でご自身のあゆみを次のように語っておられる。

―障害をもつ人たちにかかわって、私はボランティアとして、専門ワーカーやスパーバイザーあるいは理事、理事長の立場で、半世紀近く（四十四年）を過ごした。さまざまなことで、苦しみ悲しみ悩む人たちのかかわりを体験し、多

くのことを学んだ。

大学教員としては、「社会福祉」とりわけ「ケースワーク」を専攻することで人間の問題にかかわっていたし、社会福祉実践者としても、理論と実践を関連づけることの必要性を痛感していた。一般に「一兔を追う者は一兔をも得ず」と言われたりする。たしかに福祉実践に長時間を費やすため、机上での研究はかなりの時間が削減された。しかし、相手を中心に感じることで、人間として成長するよう促され助けられた。そして、それが実践と理論の研究にも役だったといえよう。―

存在感のある先生であった。ダンディで物静かな先生であったが、学生・院生を大切に、酒を飲みながら共に語ることを楽しみにしておられた。実践では先頭に立って障害をもつ人のみならず、すべての人々の生活者としての視点を忘れ

ず粉骨碎身して働き続けた。車イスの人とともに誰もが利用できる地下鉄建設をめざしての街頭デモでも先頭に立つて歩いた。まさに「慈なる人」であった。

そして「勇なる人」でもあった。若き日の海軍主計少尉としての「志」を生かすために、神は二つの戦いの場を与えた。障害をもつ人とともに社会の差別や偏見と闘った。また体育会ヨット部部长として「海」の上での戦いの場に挑んだ。二十五年間の在任中に、全日本学生ヨット選手権でヨット部は十二回の総合優勝・クラス優勝を遂げている。毎年の年賀状にはヨット部の戦績が詳しく報告されていた。病床にあっても最後までフアイト溢れる一生であった。

黒木保博（文学文学部教授）

# 渡邊英一先生追悼



## 渡邊英一氏略歴

一九一九年一〇月二九日生まれ。四三年四月同志社大学文学部を卒業後、名古屋帝国大学環境医学研究所助手、広島県立中央児童相談所などを経て、五四年四月同志社大学助教授として入社。六三年同教授に就任。八五年名誉教授。この間、宗教部長、幼稚園長を歴任。また、九七年には、豊四等旭日小綬章を受章。

一九九九年九月三日米眠 七十九歳

私が渡邊英一先生に始めてお目にかかったのは、先生が同志社大学心理学同窓会の初代会長の時だが、女子大学に奉職してから親しくして頂いた。始めは同じ研究室同居であったが後、先生は家政学

科に移られ楽真館四階の児童心理学研究室に落ち着かれた。先生はまことに温厚で、口数は少なかったが、私が述べる教育論、最近読んだ図書の紹介等には耳を傾けて下さり、質問と批評をされた。人は読んだ事を忽ちスラスラ話せる訳ではない。私はそこで講義の予行演習をさせて頂いていた様に思う。先生はタバコがお好きだったが私には「コーヒーか紅茶か」と聞かれてから、それを出して下さった。

先生と私が学生主任であった頃、三時のお茶の時間には学生課で職員と共に団欒し、学生の問題、報告や意見等、多々

聞いた。先生はいつも穏やかな意見を述べられた。先生は研究熱心で多くの報告を学会、研究会で発表されていたがそれを私に吹聴される事は無かった。

先生は時に三人のお嬢さん方の話を幸せそうになさった。同志社幼稚園通いのすえのおじょうさんの手を引いて、やつでの並木道”を歩まれた様子は今も目に浮かぶ。告別式の時、成長された往年のオチビサンを見て私は感無量であった。後年先生は同志社幼稚園長を二期勤められ「今日は幼稚園の運動会だね」とごきげんの日があった。

先生の定年退職後、私は先生の居られた研究室に移り児童心理学研究ゼミを担当したので、先生は長年の古い住まいに度々来られた。その四年後には私も退職、非常勤講師として、デントン館の名誉教授室にいた頃、先生が立ち寄られ「これ

から京都市の三歳児検診に行く」(多年この検査をされていた)と言われるのを聞き、長年ご勉強の日仏学館のフランス語学習に行かれる姿を度々拝見した。

大学卒の昭和十八年から二十一年迄、先生は名古屋航空研究所航空医学研究室、名古屋帝国大学の航空医学研究所と環境医学研究室に勤められた。戦後、長崎外国語短大、広島県の労働科学研究所や中央児童相談所勤務を経て同志社女子大に就任された。日本心理学会、日本教育学会等多くの学会に属して心理学と教育に精進され平成九年四月には勲四等旭日小綬章を受けられた。ほっそりとされてはいたが健康そうであった先生を思う時、突然の訃報を悲しく思う。

深田尚彦(天阪芸術大学・浪速短期大学学長)

## 山本明さんを偲ぶ



山本明氏略歴

一九三二年一〇月九日生まれ。五七年三月同志社大学大学院法学研究科を修了後、同年同志社大学文学部助手として入社。六〇年同専任講師、六三年同助教、七二年同教授に就任。九三年退職。  
一九九九年九月二十八日永眠 六十六歳

先生が亡くなられてから四カ月がたった。こう書いてから思い返すと、私はいつも「山本さん」と呼んでいて、「先生」とは呼んだことがなかったのに思い至った。私が同志社に入学した一九六〇年当時、山本さんは専任講師になったばかりで、二回生になって、私は「世論・宣伝」と他に「英書講読」の単位をとっている。本来ならば、素直に「先生」と呼ぶのが当たり前なのだが、いつまでも「山本さん」がしつくりくるのである。

当時の新聞学専攻は伝統的にデモクラティックな雰囲気があり、学生の間でいわゆる先生を呼ぶときも「さん」づけが当たり前であった。山本さんは当時二十代の最後の年、学生との年の差もあまりなく、やんちゃな兄貴分の役割を演じていた。

当時、山本さんの文体は非常に正統的

で、後の分かりやすいアイデアに満ちた語り口調の文体からは想像できない硬質な印象を与えるものだった。私個人としてはこの当時の仕事が好きである。内容も、編集権や戸坂潤論など影響を受けた論文がある。特に後者の「戸坂潤論」は戦後の再評価の口火を切った論文として現在でも重要な役割をになっている。

一九六一年四月に鶴見俊輔さんが教授として着任されてから、山本さんの仕事が大きく変化した。鶴見さんは人を育てる名人であり、山本さんも鶴見さんとの出会いで関心が多彩に、豊かになった。

私が大学院に在籍中にお手伝いしたことがある「メディア史研究会」は京大人文研の加藤秀俊さん、多田道太郎さん、関学の津金沢聡広さん等を加え、それが「現代風俗研究会」に発展した。この研究会は山本さんの関心をマス・カルチャー論

に向けた。この頃から新聞や一般雑誌、テレビなどに露出することが多くなり、一九八六年には『朝日新聞』の「私の紙面評」を担当し、その活躍は学界を越えて、全国区的な広がりを持つようになった。それが『社会的広告史』『現代ジャーナリズム』『戦後風俗史』『カストリ雑誌研究』など数多くの精力的な作品に結実した。

一九八八年一二月のある夜、出版記念会の帰途に倒れ、以来十一年間の闘病生活を送った。実質的に仕事ができただのは五十代の前半まで、その短い人生を一気に駆け抜ける勢いで大量の仕事を成し遂げた人であった。

山口功二（大学文学部教授）

# 志途上で逝った先輩を悼む

— 清水さん、さようなら



清水征樹氏略歴

一九四三年四月二日生まれ。六九年三月同志社大学大学院法学研究科修士課程修了後、鹿児島大学法文学部助手を経て七四年同志社大学法学部専任講師として入社。七六年同助教授、八八年同教授に就任。  
一九九九年一〇月一九日永眠 五十六歳

研究室にはいつも数篇の書きかけ原稿がつるされていた。しかしそれらはついに完成稿にならなかつた。

「八月末には原稿を持ち寄るよう」という電話がかかったのは春頃だったか。七月に見舞ったときも念を押された。「フアシズムを育てるデモクラシー（清水）」と私はメモしている。生死の境で宙づりになりながら清水さんが熱っぽく語っていたのは学生時代以来の「反戦反フアシズム」という視点だった。

二十九年前の論文「戦後法学の原点と実証主義的思考方法に関する一考察」を、清水さんは次の文章で縮めている。「全ての法理論は、戦争とフアシズム否定という政治的立場といかなる関連に立っているか、今厳しく問われているといえよう」。

日本の現下の政治情勢に見えていたの

は、戦争とフアシズムへの急傾斜だった。

その分析と警告をなんとか法哲学・法社会学の領域で形あるものにしたと、清水さんは最後まで仕事への熱意を持ち続けていた。「これをやらないと死んでも死にきれない」と電話口で絞り出すように語った。しかし時間は残されていなくなつた。生きて仕事をしたいと一心に念じているのに肉体は容赦なく死に向かつて急いでいるという窮極の自己分裂、残酷だと思つた。しかし清水さんは最後まで氣力を保ち、己を奮い立たせ、崩れることはなかつた。清水さんはこんな愴愴たる最期を私たちに見せた。

清水さんの生きザマを貫いていたものは何であつたかと考える。ロマンチストであつたことは疑いがない。そして自分を偽ることをしなかつた。というよりできなかつた。だから思わぬ対立や葛藤も

あつたらうと思う。学生時代に好きだつ

た言葉に「真理似寒梅敢侵風雪關」がある。私はこの言葉に清水さんの生き方をみる。また新島と同じようによく後輩に訓戒をたれ激励した。三十三年前に赤線を引いて読んだ『新島襄書簡集』（岩波文庫）がある。学生達に語る新島と清水がいかにか重なり合うかを私は今はつきり了解する。清水さんもまた篤実であつた。だから彼の病室は友人達で埋まつていた。ロマンと誇りと篤実と、それが清水さんだった。

志半ば五十六歳で逝つた先輩と残された私たちが共に有する感情、それは「無念」につきる。最後の入院直前に撮つた笑顔の清水さんと六人の同志の写真、とめどない温もりが哀しい。

舟越耿一（長崎大学教授）